

卒業生集会 チアンジュールで開催

2007年11月2日から3日間、ジャカルタの東南約100kmに位置するチアンジュールのPPKIJ-C.P.I職業訓練センターに、ジャワ島各地から、C.P.Iの教育支援を受けた卒業生代表50人(および地元の現里子100人)が集り、今後の活動についてシンポジウムと分科会を行った。会議に出席したC.P.Iの会員は、その後各地を巡り、教育里子たちとの交流を行った。



これからの、“教育里子卒業生の組織化”について活発な討議

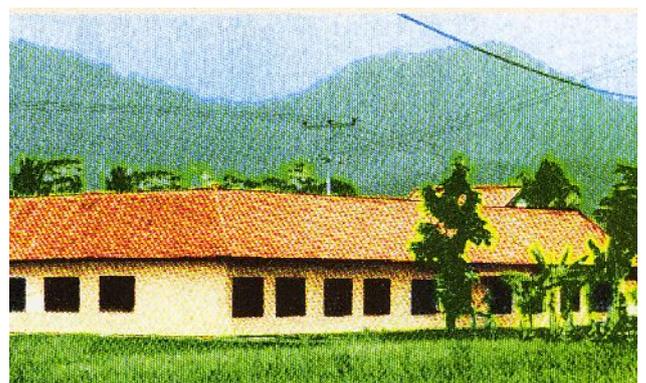
11月2日は全国からの代表者たちの受付があり、出席予定者の無事到着を確認した。宿泊は、当初同センターの寄宿舍の予定であったが、修理の必要などがあるため、チパナスのコテージを利用。11月3日朝に会議を開始した。来賓の内務省の、Drs.スプラウト社会政策部長の挨拶は、歴史の転機を感じさせられた。要旨は次のとおりです。「1928年、我が国の独立を図って“青年の結集”を企図し、成功した。しかし、今や当時の“青年”は老年になり、新生のときが来ている。“自信に溢れる青年を育てること”、“世界の良き社会と交流し、ともに活躍し、影響を与えあうこと”。これが何よりも大切である。今年、内務省は、C.P.Iとの協働覚書を結んだ。その目的は、この大切な命題達成に向けての、良きパートナーと考えたからである。C.P.IとPPKIJは、20年間に及ぶ教育里親制度のプログラムにおいて、そしてこれからも、ともに歩んでくださるだろう。」

3日は、PPKIJのリーダーをパネラーとして、地域センターのあり方、教育里子卒業生の「組織化」の必要性などについてパネルディスカッションが行い、午後から会場を宿舍の会議室に移し分科会に分かれて討議、夕食後、グループごとの総括発表を、夜9時から行った。正味約10時間におよぶ会議で、そのエネルギーに圧倒された。

次ページに続く



里子卒業生とのミーティングは熱心に夜遅くまで続いた。



※ チアンジュールの職業訓練センターは1997年に日本政府「草の根無償資金協力」の支援により建設された

4日には、お医者さん、社会活動家、学校の先生などいくつかの分野での成功例を、各地の教育里子卒業生が発表した。小冊子にして教育里子たちに配りたいとの希望があった。早々に実現されることを期待したい。

4日の昼食前、C.P.I.小西会長は、卒業生会組織の活動開始を、翌年一月に巡回相談することを約束し、閉会を行った。今回の交流団として参加したC.P.I.会員たちとの、2日間と短かったが仲良くなった別れを惜しみながらのひとときは、暖かいものがあった。

なお、交流団は、夕方に4日の夕方、バンドンに移動し、会議に来ることができなかった子どもたちとは、4日にバンドン、6日にジョグジャカルタで、それぞれ会うことができた。

ジョグジャカルタで見た、地震後の復興

翌日5日は、バンドンからジョグジャカルタは遠い(10時間以上かかる)ので、パンガンダランと言う海辺の町に移動し、一泊後、ジョグジャカルタへ。6日の夕刻、里子達との面会をした。

今回の里子訪問ツアーでは、教育里子と卒業生たち、PPKIJのリーダー、その他の現地での協力者(学校の先生など)の連絡がよくとれており、先々でその様子を感じ取ることができた。また、全行程を通じ、仕事を休んでドライバとアシスタントを務めてくれたヘルパー君と通訳をしてくれたディナさんに感謝したい。献身的な彼らのフォローで、我々は楽しく、且つ有意義な里子交流ができた。



卒業生組織化、広報など分科会で討論した



感服するのは、ジョグジャカルタのリーダーをしている、専門学校教師のステイクノさん。同氏は、自宅の二階を、PPKIJの地域事務所に提供し、活動をよく手伝える大学生たち数人に住居を提供している。同氏はクルアルガNo.1でも紹介されているとおり、非常に熱心に青少年の育成に励んでいる。

昨年の大地震では、地震で倒壊した管轄地域の教育里子の家屋復興にも先頭きって頑張られた。自宅兼事務所が倒壊したが、教育里子の卒業生や現奨学生たちが再建に努め、短期間で復興したのは驚嘆に値する。

C.P.I.の輪が広がっています

「このようにインドネシアの各地で助け合いをするなど、CPIに関わる人たちによる社会活動の輪は、大きくなっています。

インドネシアは今でも貧しい民衆が多いのです。学校へ行けなかったり、通学を断念せざるを得なかったりする子供たちがまだ大勢います。

また、学校を卒業しても仕事に就くのが難しい人たちも多いのが現状です。

今、教育里子たちは、CPIの会員の皆さんの支援のお陰で、自立を始めています。皆さんの支援が、一時の学業の援助にととまらず、自助努力での自立という形に成長し始めています。まさに、CPIが目指してきた姿を実現しかかっています。

私たちは今後も、インドネシアの協力メンバーと



中部ジャワ地震の被災の後、C.P.I.の皆さんの寄付金で建てられた家屋。竹で作られた壁が、いかにも涼しげです
(写真提供:千葉地域会、岡崎氏)

手を携え、子どもたちを育てていきたいものです。また、里子訪問ツアーに参加したことのない方は、是非、参加してみてください。旅行社の企画する通常のツアーでは知ることのできない楽しいことが、たくさんあります。

(レポート:天沼光太郎)

何が私をここまで頑張らせてくれたか

スリ・ハンダヤニ(大学4年生)

私は、ガジヤマダ大学の第7セメスター(4年生前期)で、社会政治学部社会学科を学んでいます。中学3年から大学2年まで、私はC.P.I.-PPKIJの奨学金を受けていました。私にとってこの奨学金は経済的だけでなく精神的にも大きな後押しになりました。そして私はこの力を後輩たちや社会のために役立てようと思っています。



奨学金を受けたいきさつ

私はジョグジャカルタ州バントウル県バングンタパン町に住んでいます。中学校2年生まで成績が良かったので、父親の友人に、日本のC.P.I.Japanの「教育里親制度」による奨学金を紹介して戴きました。申込申請の前に、C.P.I.のインドネシア奨学組織であるPPKIJジョグジャカルタ事務所で地域リーダーのステイクノさんに会わせてもらいました。

学校の成績や今まで参加した学校外部活動などに関する面接を受けました。将来の夢などに関しても聞かれました。学校を通してPPKIJに申請書を送られ、合格通知発表は学校で行われました。あの時の感激を今でも忘れません。

教育里親制度プログラムで考えたいこと…後輩への無料塾や、里親さんとの文通のことなど

私は、C.P.I.-PPKIJの奨学金を受けたお陰で、学校の活動や勉強に集中でき、とても助かりました。奨学金で、学費を払い、おかげ様で文房具や教材を買うことができました。勉強する気も高まり、PPKIJの活動、例えば先輩達が指導した塾や日本語塾に熱心に参加できました。私にとって、その全てが初めての経験で、私自身とても勉強になりました。ところが状況が変化し始めていきました。先輩たちが忙しい中でも時間を割くための予算がなくなったのでしょうか、それらの活動が進まなくなりまし

た。継続的に参加する友だちも少なくなり、有効に活動できなくなったのも理由でしょう。ジョグジャカルタでその後も続いた里子の集まりは、特別な行事の為のミーティング、例えば断食明け祭りや、日本からの里親歓迎会と奨学金配布のときぐらいになってしまいました。教育里親さんに熱心に手紙を書いていた数人の里子も、手紙を出してもお返事が戴けなかったのが、教育里親に手紙を送る意欲を無くしました。これら回復すべき課題を含めて、スピーチを致します。

大学へ進学するとき…進路を決めた気持ちを大事にして、あきらめないことが肝心でした

高等学校はジョグジャカルタ第6国立高等学校に通いました。学校まで1時間もかかるほど遠かったのですが、その高等学校は人気ある学校でした。ところが、高校3年生の時に、父親のビジネスがうまく行かず経済の状況が極めて厳しくなりました。姉はガジヤマダ大学獣医学科に通っており、実験・研究等の為の実費は、貰っている奨学金では足りません。兄も高等専門学校に通っており、その費用を賄うのも大変でした。そんな家庭環境で、私の大学進学は大問題でした。でも私は、「私は絶対に大学に行けるのだ」と信じ、持ち続けて

きた夢を叶えるため、歩む道を決めていました。高校2年生から、社会開発学に魅かれたからです。家族は、私の高校の成績をみて、なぜ理工系を選ばないかと言いました。社会学は頭の悪い人、成功しない人が行く所という家族の先入観があったのです。学歴のない父母だけでなく周囲の人たちも同じ意見でした。彼らに「Sociologist = 社会学者」という言葉は新しい言葉で、社会学とは何かに関して理解できなかったようです。

私はそれでも希望を変えませんでした。それを理解しているのも歩むのも私自身だから。

次ページに続く

大学へ行くために、政府のクロス補助システムと C.P.I.の支援を戴けたのは、ありがたかった

高校3年生になって、2年生の時からの夢、ガジャマダ大学(UGM)の政治社会学科に入学する希望がより強くなりました。UGM に無料で入学し、学費もかからないようにしたいと考えて、たくさんの情報を収集しました。

国立大学である UGM は、地方分権の政策方針により、BHMN = 自立運営大学(国立大学だが、国から補助金をもらえない大学)に変わり、学費が高くなったのです。(※大学の企業努力はまだなかった)すべての大学経費は大学生の負担です。

大学の設備費だけでも最低500万ルピア(約6万円)という膨大な寄付が必要でした。科目(SKS)当たりの費用も6万ルピア/科目かかり、24科目もありますから、科目代

は144万ルピアとなります。その他に年間の学費は100万ルピアかかります。私の家族にとっては「とんでもない」費用です。父親は、たとえ CPI-PPKIJ から支援が続けられても無理だろうと言い、進路変更を勧めました。

しかし、UGMは上級大学であり、得られる知識の価値は高いのです。私は諦めようとは思いませんでした。交渉して、村役場から貧困証明書を発行してもらい、「クロス補助システム」という国の制度を利用することができました。「クロス補助システム」とは、貧乏な学生に対し、科目が完了するまで科目費用が無料でもらえる制度です。C.P.I.-PPKIJ からは学費の補助が150万ルピアありますから、とうとう、UGMに行く見通しがたったのです。

卒業生として C.P.I.-PPKIJ の活動をもっと進めたい・・・日本の皆さん後輩たちの支援をお願いします

私は、大学時代に体験したボランティア経験を活かし、PPKIJの活動の活性化に努めたいと考えています。

大学するとき、私と大学の友達は、高校3年生の後輩たちを対象に大学受験の準備の塾を開き、貧乏な人でもUGMに入学できるとモチベーションを与えました。

2006年のジョグジャカルタ地震では、自分の村の状況がひどくなかったため、助けを必要としている人は沢山いると感じ、大学の支援団体でバントウル村の地震災害支援を手伝いました。

奨学金のプログラムは、必要に対してなされなければならぬので、確かに簡単ではないと思います。

地震のとき PPKIJ からは、物や家庭用品の支援を戴きましたが、本当は奨学金の支援が有難かったです。何故かといえば、大学3年生からは C.P.I.-PPKIJ の奨学金を戴けなくなっていたからです。幸い私は、地震被害者を対象とした UGM の政策で、当セメスター(学期)の学費を無料となりました。それは、神様の贈り物に思えました。

大学生の難しさは他にもあります。大学からの奨学金は、C.P.I.-PPKIJ の奨学金と重複することができません。でも、ともに十分ではないのです。4年大学を卒業する必修科目は6セメスター(3年後期)までありますので、アルバイトとの両立はととても大変です。私は3年生になる前か



集會に集った卒業里子の仲間たちとサリさん(2列目中央)

ら大学生協やスーパーでアルバイトをしていましたが…。今は、時々教授の手伝いをしています。

実際に、あと一年、奨学金の期間を延ばして戴ければ、たくさんの学生が助かるでしょう。

それから、大学生たちは、後輩の教育里子たちのために無料塾を続けたいのです。でも、いまの仕組みでは、教育里親さんからの奨学金は、学費や卒業試験費用(中学生、高校生)のための費用でギリギリだと聞いています。ですから、昔のように無料塾のテキストづくりや交通費などを援助して戴くことができません。どうしたらよいか、C.P.I.の会長の小西さんは、今日の会議で、私たち卒業生は知恵を出して欲しいと言われました。

2008年には、私たち卒業生が活躍して C.P.I.-PPKIJ の活動をもっと進めていけるようにしたいと思います。教育里親制度の発展のために、よろしくをお願いします。

里子交流会に参加して

(投稿) 村上 令子(群馬県)

11月2日 慌ただしく成田を飛び立った私は、夢心地でインドネシアの大地を踏んでいました。我が里子に会いたい一念が、ついに私を奮い立たせ、そして、その子に会うことが出来たのです。

一番会いたかった里子に会うことができました

名前はエファ。彼女との出会いで私は大きな喜びと同時に教育里子は私にとってどういった存在なのか今まで以上に考えるきっかけを与えられました。

彼女に一番会いたかった理由、それは単純に「自分の娘と同じ年だから」でした。

私が C.P.I. に入会したとき娘はまだ1歳だったから、入会当初は里子といっても子供というには年が近すぎて実際には手紙のやり取りが楽しい海外の友人というような感覚でした。いつしか年数がたち今回はとうとう娘と同じ年の里子になり、それだけで何か思い入れが違う気がしました。これは理屈なしですね。そんなエファとの出会いは思いがけずやってきました。

彼女は大学生、我が娘と比較して複雑に

エファは優等生タイプというよりは、感性豊かで社交的な魅力のある子でした。彼女の周りにはいつも友達がいて楽しそうだったし、携帯でメールをしたり写真を撮ったりしていました。今年の9月から大学生になり自主的に日本語の勉強もがんばっていると教えてくれました。そんな屈託のない素直な彼女を見ていると、ウチの娘も普段はこんなかなあと思い、国や境遇は違っても基本的に若い子は変わらないんだと感じました。その分、親しみと愛情が深まりました。

しかしそれと同時に複雑な感情もわいてきました。私事ですが、わが子は今高校3年生、卒業後は夢をかなえるために自宅を出てホテルスクールで勉強する予定です。研修制度というのを利用して昼は学校で学び、放課後は指定のホテルで夜11時ごろまで働くこととなります。本人の希望とはいえその制度を利用するのは、娘が家庭の事情を考えて決断したと察することができ、親としては内心、心配で仕

11月3日の朝、朝食を食べているとき C.P.I. インドネシア事務所のウチさんが数名の里子を連れてきてくれました。あまりに突然だったので私ときたら顔はニコニコしているのですが頭はボーっとしてしまい、握手をしたとき彼女の手には私へのプレゼントまでありましたのに、自分の里子だとはまったく気が付きませんでした。改めて名前を紹介されて始めて気が付いたときには、あまりのうれしさに思わず抱きついてしまいました。彼女は卒業里子代表者会議に出席したので一日半も顔を合わせることができ、話しをしたり写真を撮ったりしてお互い喜びを分かち合いました。



エファ(最右)の友だちと村上さん(中央)

方ありません。そんなことがいつも頭にある私ですから、楽しそうな大学生のエファと自分の子のこれからの苦勞のことを比べてしまい、なんだか今まで自分がやってきたことに自信がなくなってきました。そんなこと比較できないことは、もちろんわかっているのです。頭では十分わかっているのに、親の心というのは厄介なものです。子を思うあまりに時に心が狭くなり、つまらない感情がわいてくるものです。

次ページに続く

違った境遇で夢見る同世代の娘、根っこは一緒

そんなことで、こんな“もやもや”のままエファと分かれたらせつかくの出会いも喜びが半減してしまうと思ったので、もう少し彼女を理解したいという気持ちから、通訳に入ってもらい話をしました。「将来何になりたいの?」「小説家」すぐに答えが返ってきました。予想もしなかった答えに私はとても驚きました。そしてなぜか心の雲がいつぱんに吹き飛んでしまいました。どうしてなのでしょう、自分でもこれ以上言葉にできません。

そんな彼女に私は自分の子のことを話してみました。すると彼女は真剣な面持ちになり、「たいへんね」といいました。学校に行きながら同時にその勉強を生かしつつ働く、夜遅くまで。日本の学校にはそんなシステムがあるということ、そして自分と同じ年の子がその状況で学び働くということ、彼女にとってはかなりの驚きだったに違いありません。

この出会いで彼女は何を感じてくれたかな。



集会に参加した愉快的卒業里子たち

エファ、あなたが私の里子でほんとよかったよ。おかげで私も少しは成長できたかも。一人の人間が大人になっていくということは、どの国であっても並大抵のことではありません。それを見守る親の思いは時代や国や立場の別はあっても根っこは同じなのかなと思い、本当はエファのお母さんにもあって話をしたかった。「お母さんによろしくね」何度も彼女に伝えました。でも実際会ったら泣いちゃったかもしれません。インドネシアでの8日間、毎日現地の人々が次々と集まってくれたことは、驚きと感謝でした。ダウンしてしまった日、通訳のディナ（女性）と小西会長のアシスタントのヘル（男性）が、すごく心配して親切にしてくれました。彼らは恩人です。夢のような日々を送ることができました。

Terima Kasih. [テリマカシ=ありがとう]



里子卒業生で大学に進学した女学生で編成された音楽グループによる歓迎

忘れられない地震の思い出、今もまだ・・・

ジョグジャカルタで昨年の大地震の救援現場を見ました。11月7日には、昨年起こったジャワ中部地震で被害に会った里子リンダさんの家に行き、家族の人々に会ってきました。日本でも地震はひとつではありません。今年柏崎で起こった地震では、ウチのもう一人の子どもが被害に会いそうになりました。地震当時、高速バスで柏崎付近をちょうど通っていたので、家に帰れなくなってしまったのです。殆んど連絡が取れず、次の日の遅くに「帰れた」の3文字のメールが届いた時のホッとした気持は、今も

忘れられません。地震はいつどこで起こるかわからないし、被害も大きい。C.P.I.が昨年の地震で迅速な救助を行い、多くの里子家庭の助けになったことは、我がことのようにありがたく思います。

多くの私たちの里子たちが、言葉では言い表せない「こころ」を胸に秘めて私たちが歓迎し、もてなしてくれました。スマラン娘のディナにもお世話になったし、もしまた行けるのならスマランに行ってみたいと思います。

厳しいりんご農家の生活の中で勉強を続けています

マランの教育里子でマランステート大学の経済学部に所属しています。マランは西ジャワに位置し、“花の街”と寒い気候で知られています。マランから25キロほど西に“サムル”という小さな村があります。ポンチョクスモという山の斜面に面したそこが私と家族の住んでいるところです。ポンチョクスモとはジャワ語でポンチョは5を、クスモは花を意味します。“5つの花”ということです。大学のために、私だけ、マランの街に部屋を借りて住んでいます。毎年家賃を払わなければなりません。週末には家族に会いに帰ります。とくに姪はとってもかわいいのです。

貧しいりんご農業、でも楽しい家族

父も母も同じ村の出身なので家族全員ポンチョクスモに住んでいます。我が家は父母と姉と姪とが1つの家に住んでいて、父はりんご農業をしています。彼は8人兄弟の2番目です。母は家事をして家にいます。彼女は7人姉妹の長女です。そして私の姉は彼女の夫が亡くなった2004年以降、村でイスラム教を子ども達に教えています。姪は2歳になります。

父が我が家の毎日食べるお金を稼ぐ大黒柱です。

りんご農家になる前に、父は村の交通ドライバーとして働いていました。しかし今は前よりよい暮らしができるようになりました。りんご農業はよりよい収入を得られます。私たち家族には、質素な生活とでも十分だったのです。

一家仲良く、楽しい生活でした。



ムリティニシィ(大学生)



ジャワ島で一番高い山。Mt.Semeru(3676m)は活火山
ポンチョクスモはそのふもとにあります

突然の苦境を救ってくれた C.P.I.の奨学金

ところが、2002年から2005年にかけてポンチョクスモりんご農家にはよい年ではありませんでした。たくさん農家が収穫に失敗しました。日照り続きで木が折れたり傷み、実がなりません。この災害は私たち家族にもおこりました。通常りんごの収穫は半年に1回です。しかし私の家族は2回も収穫できませんでした。2004年半ばから2005年の1年は収入がなかったのです。(木の被害はたぶんサムラ山(3676m)からの火山灰だと考えられます。サムラ山は東ジャワで今も噴火の活発な山です)

家族は苦境に陥りました。でも私は勉強をやめなくてすみました。なぜなら C.P.I の教育里親さんからの奨学金があったからです。私にその支援をしてくださっている山口県の津田さんとの交流は、7年にもなります。 そのお金は私の家族を大きな負担から救うものでもあります。

手紙を交換することで勉強する意欲がわいたり、こちらに来ていただいてまたやる気がでたりします。私の友だちも、ほかの教育里親さんから勉強を続けるお金を支援して戴きました。私たちは、里親さんたちに何かを差し上げることはできませんが、心をこめて“ありがとう”と言いたいです。そして神様だけが功德をくださることでしよう。



C.P.I.のインドネシア教育里親制度の現地取り組みを高めます

2003年、教育環境の激変を契機に、支援方法の改革を開始

インドネシアで中学3年生以上の子どもを育てている家庭は、教育事情の変化に困っています。2003年には何度も教育大臣が変り、そのたびに教科書が変るので、年に何回も教科書を買うことになりました。中学校の卒業試験費用があがり、高等学校の入学金や授業料は2倍近くなり、貧困な家庭では子どもの学業を続けさせることが、以前よりも難しくなりました。2003年からのC.P.I.理事会とPPKIJ中央委員会および9ヶ所の地域リーダーとの合同会

議において、C.P.I.本部からの教育支援金の使い方を抜本的に改革する提案がなされました。それまで戴いた支援金の70%を子どもたちの学費や通学費、里子会活動に使ってきました。30%は、
(A)毎年の奨学生選考費用、
(B)地域活動拠点の費用、地域リーダー会議交通費、
(C)PPKIJ本部の事務局費
に使われていました。後者の資金源を別途考えようとの改革案でした。

子どもへの直接支援を増やすこと、中学生からの支援開始を継続すること

C.P.I.理事会からの提案は、子どもたちの、とくに高校生の苦境に対応する必要からでした。高校生の学費支援を一気に倍に増やす必要があるとの試算が提示されたのです。そのためには、上記の(B)(C)の費用を賄う原資を、教育里親からの資金でなく、別に求める必要が出てきました。苦悩の選択でした。何とか、青年活動センターや地方政府からの補助を得て、2005年から新予算体制で走り始めました。

立大学入学ができるように支援しよう」というところに特徴があります。新しい中学生を選ぶことができなければ、この理念が弱くなります。この問題を、2003年から2005年の3年間、教育里子たち、とくに高校生・大学生と話し合い、なんとか学生たちの理解を得て、2006年からは教育支援を大学2年生までとする改革を行いました。大学生からは、「必須科目がある3年生の終了まではアルバイト時間がとりにくい」との指摘が結構ありましたが、何とか頑張ってもらえることにし、実際なんとながっている現状です。その代わりにC.P.I.は中学生支援を続けることを約束し、一定の教育支援額を維持することにしました。結果、教育里親からの支援金を超えて支援金を送る体制が、2年続いています。

また、教育里親の減っている中、大学生の教育里子が全体に占める割合が高まっている現状への警鐘が鳴らされました。そのままでは、新しい中学生教育里子を選べなくなるという問題意識からです。C.P.I.-PPKIJの活動は、「貧しい家庭に育っているが成績優秀で活躍的な中学生を選び、高校入学、国

教育里親制度の支援側モラル確立、奨学金管理、教育里子の調査報告を、充実させます

今年に入って、インドネシアは『すべての階層の青年に自信と誇りを』との国家目標を掲げました。そして、地方政府では、C.P.I.が行ってきた『教育里親制度による中学～高等教育課程の学生支援』という仕組みが注目を浴びています。中央政府内務省は、C.P.I.との協働でこの制度を発展させるため協力を

することになり、覚書を締結しました。協働の主導権を取るべく、小西会長は、全国の卒業里子たちとの巡回協議で上記3点の充実に入りました。とくに調査報告の仕組みを、教育里子の居るコミュニティとの協力体制を作って一新しつつあり、2008年度には、その成果が出るはずです。

非政府活動体(NGO)であるC.P.I.は、意識の高い市民の皆さんの支えが必要です

C.P.I.は、国連やUNICEFも手をつけ難い分野での教育支援を20年続けてきました。インドネシアでは、あと一息で大きく報われようとしています。

現地の活動力を高めるためのご寄付も戴いています。ここで大事なのは、日本の教育里親の力を増やすことです。志ある方のご紹介を益々お願いします。